



the COMMUNICATOR

月号

心と心、世界と日本を結ぶ*コミュニケーター

私と国際交流・インタビュー

歌に導かれて

さめしま ゆみこ
声楽家 鮫島 有美子

母の実家、東京都文京区本郷で生まれて、父は会社員、母は内閣府の秘書課にいたそうです。父はインドネシアで終戦を迎え、外語大でオランダ語を学んだこともあってか、そのまま何年かその地で通訳の仕事をしていたそうです。幼い頃、家に最初に遊びにみえた外国人は父の友人のインドネシア人です。違う国の方だと意識したことを覚えています。今思えば、父からは戦争の時のことなど、もっと聞いておけば良かったと思います。

物心ついたときには、いつも母が子守歌を歌ってくれていました。ありとあらゆるジャンルの歌で、中には「楠木正成の歌」もありました。小・中学校は公立で、音楽は好きでしたが、スポーツは苦手でした。小学4年の頃、アメリカと日本のハーフの男の子が転校して来ましたが、スポーツ万能でたちまち人気者になっていました。

高校は音楽を学べる学校を希望して、都立駒場高校芸術科に入りました。そのころは千葉の市川に住んでいて、市川駅6時47分の始発で、15人位の「越境通学」の生徒がいつも同じ列車に乗り楽しく通いました。この時代の何人かの仲間は、今でもコンサートに来てくれます。

●初めての海外

音楽を学べる大学に入り、初めての海外は24歳の時、大学院を出てドイツ政府の奨学金を受けての留学です。その試験のためドイツ語は2ヵ月位の集中講座を受けましたが、言葉が話せるかというよりも、自分の意思を相手に伝えようという気持ちがあるか、間違いを恐れないかという点を見てくださったようです。

いざ一人で飛行機に乗ると心細くなり、当時はアンカレジ空港で乗り換えでしたが、英語の会話などまだおぼつかなかったはずなのに、少し持っていた日本円をドルに換えて、電話用のコインを何とか買うと家にコレクトコールを掛けました。必死になると、こうしたこともできるのだと今でも思います。母が電話口に出て、泣きながら何

を話したかは覚えていません。ただ、母の声を聞いてなんだか安心してすっきりして電話を切ったのですが、母のほうは夜中の3時半、突然の電話に何かあったのかと心配でたまらなかったそうです。飛行機の隣りに座っていた商社の方は、泣いてばかりの私を一生懸命に励ましてくださり、その後、名前を見つけて、何年間かコンサートに来てくださいました。



1952年、東京生まれ。74年、東京芸術大学音楽科卒業後、同大学院修士課程修了。75年、二期会オペラ『オテロ』で主役デビュー。翌年、ベルリン国立芸術大学留学。81年、同国ウルム歌劇場(1641年設立)専属歌手となる。2009年、「天皇陛下ご在位20年記念式典」で祝いの歌、19年、同「ご在位30周年記念式典」美智子皇后作曲こもり歌「おもひ子」独唱。

●世界の仲間たちとの日々

ベルリン留学の前のドイツ語学校の地、ブリーンに着いて4ヵ月の寮生活。様々な国の人が集まり、共同キッチンでは皆で食事を作り合います。アルジェリアの男性はクスクス料理、アラブの人たちがお米を炊いたり、インドの教授は、当時日本にはなかったグリーンピースとひき肉のサラサラのカレーを作ってくれました。普段はメイドさんがお料理を作るので、自分が作るのとは大切なお客様が来るときだけと話してくれました。トルコの教授にはトルコ語を教えてもらい、イスラエルの男性は、

帰国すると軍隊に入らなければならないと言っていました。皆それぞれですが、習いたての片言のドイツ語が飛び交っていた私の初めての外国生活は、とにかく「混沌」とした大勢の仲間との楽しい日々。その後の私の人生の大きな原動力となっています。

●音楽を通しての出会い

中山悌一(ていいち)先生が中心となって1952年に「二期会」というオペラ団体が創られ、その二期会で芸大の大学院生だった私はオペラデビューをさせていただきました。日本のオペラ界の中で、二期会はいまだに大きな役割を担っています。

80年のミュンヘン国際コンクールで出会ったのは、オーストリア、ウィーン人のピアニストです。コンクールの公式伴奏者で、それまで何度も日本に来ていたらしい彼とはその後に結婚することになりましたが、何より初めて弾いてもらった時、なんだか自分が突然うまくなったような「音楽的ショック」は今でも忘れられません。

加藤匡夫大使にはエジプトでのコンサートの折、大変お世話になりました。日本の歌以外に、ベートーベン編曲のバイオリンとピアノと歌のアンサンブルの「アイルランド民謡集」でした。古いアイルランド語はドイツ語と英語を合体したような発音で、劇場の同僚でアイルランド人の女性から一生懸命発音を習いましたが、何と加藤大使の奥様はアイルランドの方、現地で奥様が練習を聴きながら、発音レッスンをしてくれました。実はその昔、日本国の外交官が外国の女性と結婚するのは大変なことだったと大使が話してくださいました。日本には「国際結婚」という独特の言葉がありますが、歴史を紐解いても、違う国の人と結婚することは当たり前前の海外では、そうした言葉自体ないはずで。

私は歌や音楽と出会ったことで、多くの国の方々と知り合い、過ごすことができ、文字通り「音楽に国境はない」ことを実感できた日々を、改めて幸せに思います。